

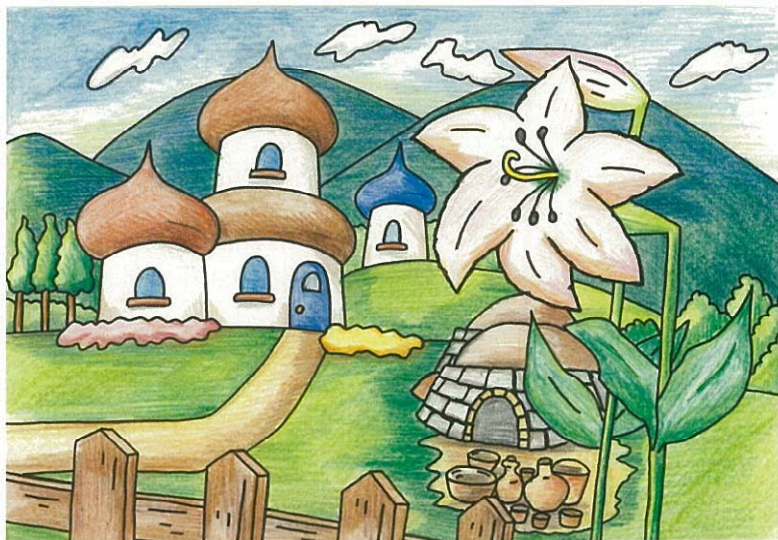
作 花岡大学

絵 前田晃宏

アマリリスのような
女の子



山の中のある村に、ひとりの女の子がいました。
朝つゆにぬれて、たった今、花びらをおし開いたばかりの、
アマリリスの花を、見たことがありますか。清らかな、うす
べに色の、ちょうど、そんな感じのする、子でした。
心がやさしくて、いつも、ほほ笑みを、うかべていました。
人のいったり、したりすることを、悪くとったことがあり
ませんでしたから、腹がたたなかったのです。
「素直で、明るい、いい子だ。」と、みんな、ほめました。
焼きものづくりの、おっとうと、おっかあとの、三人ぐら
しでした。
まずしいくらしを、していました。



ある晩のことです。

きれいな、月夜でした。

山あい村は、月の光をいっぱいを受けて、静かにふけていきました。

そのときのことでした。

とつぜん、その村へ、大ぜいの山賊どもが、馬で乗りこんできたのです。

そして、あらくれた男どもは、村外れにある、その女の子の家の戸を、どんとたたいて、「開けろ、開けろ、早く開けろ。」と、どなりつけました。

年寄りのおっとうと、おっかあは、ぶるぶるふるえて、ものもいえませんでした。

女の子は、たちあがりますと、「はい、今、開けます。」と答えて、表戸を静かに開けました。



戸の開くのを、待ちかねていたように、いちばん先にとびこんできましたのは、山賊の頭目でした。

みんなも、どやどやと、はいつてきました。

頭目は、ひげまみれの、見るからにこわい顔をした男でしたが、女の子のすがたを見るなり、おどかすように顔をゆがめて、「おい、こら、娘、わしはのどがかわいてがまんができません。なにはさておき、水を飲ませろ。水だ、水だ。」と、どなりちらしました。まるで夕飯に塩ものでも食べてのどをかわかせた、だだっ子みたくない方です。どなられて女の子はこわがるどころか、そのいい方がおかしそうににこにこ笑いながら、「はい、すぐ、くんできます。」とって水つぼのそばへいきました。

頭目は、「笑うな、笑うとしょうちしないぞ。」と女の子のあとから大声でおどしつけましたが、べつにおこっているらしいようすはなく、自分のだだっ子みたくない方が、自分でもてれくさかったからに、ちがいありません。



女の子は湯のみに水をくんで、すぐもどってきましたが、それを頭目にはなかなかわたそうとはしませんでした。頭目はどなりました。

「のどがからからだといっているのに、なにをぐずぐずしているのだ。」

「はい、水を調べているのです。」

「水など調べて、どうするのだ。」

「水の中にかみの毛やほこりが落ちこんでいては、申しわけございませんから。」

「なにっ！」

と山賊の頭目は、ちょっとおどろいていました。

「わしらはこの村へものどりにやってきた山賊だぞ。

そんなやつに飲ます水など、どうだっていいじゃないか。」

女の子は小さな頭をふって、きっぱりと答えました。

「いいえ、そうはいきません。今、水をさしあげるのは、わたしのつとめです。あなたたちが山賊であろうとなかろうと、きれいな水をさしあげないことには、気がすまないのです。」



山賊の頭目は、女の子のさしだす水を受けとると、ぐっとそれを飲みほしていいました。

「ああ、うまい。こんなうまい水を飲むのははじめてだ。おねの底まできゅっとしみとおる。ありがとうよ。ごちそうさまだった。」

水を飲んでお礼をいうのは、これがはじめてのことでした。お礼をいいますと、とてもさわやかな気持ちが、おねいっばいにこみあがってきました。すると知らないあいだにひげまみれの顔が、やさしい笑顔に変わっていました。

頭目はじっと女の子の顔を見つめながらいいました。「お前さんは、どうもわしの死んだ妹のような気がしてならんわい。」

「そう、いつなくなったのですか。」

「小さい時にな、じゃが心のやさしいかわいいやつじゃったよ。まだお前さんほどの小さな女の子のような気がしてならんわ。」

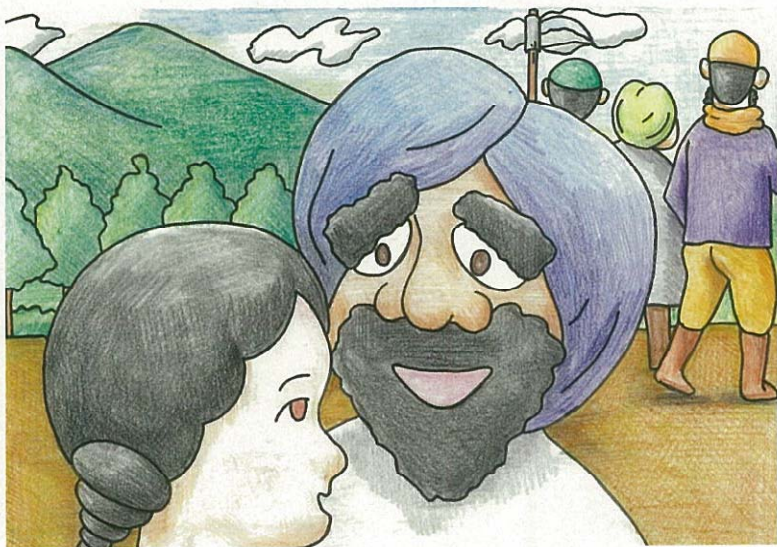


山賊の頭目の目は、そのときなみだできらりと光っていました。

頭目はそれをごまかすかのように、急に大きな声をだして手下どもに、「おい、みんな、この家の中をあらしてはならんぞ。今晚は、もうこれでひきあげるから、みんな外へでろ。」と、きびしくどなりつけました。

さっきからの女の子とのようすを、じっと見ていた手下どもは、頭目がなぜ急にそんなことをいいたしたか、よくわかっていましたので、みんな素直に外へでていきました。いちばん最後になった山賊の頭目は、やさしい目で女の子を見て、「親を大事にして、幸せにくらせよ。」と、いいました。それから、つと、女の子に、ひげまみれの顔をよせていきますと、あわてた小さな声で、「なあ、たのお。いっぺんでええから、わしに兄ちゃんと同よんでみてくれ。そっと、な、早く。」と、たのみました。

女の子は、アマリリスの花のような、うすべに色の美しい顔に、いつものようなほほ笑みをうかべますと、そっと、「兄ちゃん。」と、いいました。



山賊の頭目は、元気に外へとびだしていきましたので女の子は、おっとうと、おっかあをさそって、急いで見送りにしました。

そして今度は大きな声で、「お兄ちゃん、おたっしゃで。」と、声をかけました。

頭目は、馬の上から、うれしそうにふりおいて、「ありがとう。あんたたちも、元気にな。」と、さげびました。

それから手下どもに、でっかい声で、「さあ、山へ帰るんだ、急げ。」と、いいつけました。

手下どももにこにこして、口ぐちに、「さようなら。」

「さようなら。」と、手をふりながら馬を急がせていきました。

夜ふけの月は、ごうごうと明るくかがやいていました。

昼のように明るい村の道を、山賊どもは山のほうにおかって、だんだんと小さくなっていきました。

